

- Armağan*. İstanbul: Osman Yalçın Matbaası, pp. 37–50.
- Este'lāmī, M. 1995. *Dars-ei Maṣnavī*. Tehrān: Enteshārāt-e Zuvvār.
- Gölpınarlı, A. 1973–1974. *Mesnevî ve Şerhi 1-6*. İstanbul: Milli Eğitim bakanlığı.
- Kuşpınar, B. 1996. *İsmâ'il Ankaravî on the Illuminative Philosophy*. Kuala Lumpur: International Institute of Islamic Thought and Civilization.
- Rûmî, A. 1975. *Daqāyeq al-haqāyeq*. Tehrān: Shūrā-ye 'Ālī-ye Farhang va Hunar.

(園中 曜子 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Kai Hafez ed. 2008. *Arab Media: Power and Weakness*. New York: The Continuum International Publishing Group. iv+277 pp.

本書は、現在のアラブ・メディアを対象とした論文集である。序章に加え、「メディアの効果」「メディアのオーディエンス」など、7つの主題で計15の論文が掲載されている。内容は大きく3つに分けられる。第1に、主にアラブ・メディアの先行研究を批判的に考察し、今後の研究における方向性を示したもの。第2に、アラブ・メディアに関する具体的な事例を通時的・共時的に考察したもの。第3に、マス・コミュニケーション研究における「議題の設定機能」など、具体的な分析枠組みを用いて、今後のアラブ・メディア研究の争点となる問題を論じたものである。本書に収められたいずれの論文も、今後のアラブ・メディア研究の動向を知るうえで必読の内容となっている。

1990年代初頭に、アラブ諸国に衛星放送が登場すると、マス・メディアによる近代化・民主化をテーマに、多くの研究がおこなわれた。大部分が権威主義政権の支配に属するアラブ諸国は「後進国」であり、特に民主化されるべき地域とされてきた。衛星放送という新たなメディアの登場も、多くの場合、社会改革のための啓蒙機関とみなされ、近代化・民主化に果たす効果の大きさが常に問題とされてきた。

しかし、1960年から1970年代にかけての欧米のマス・コミュニケーション研究が、メディアが与える効果から、メディア自体の存在様式へと目を向けたのと同様に、アラブ・メディア研究においても、次第にメディア自体に着目した研究や、メディアと社会・文化をめぐる研究がおこなわれるようになった。1999年にアイケルマンとアンダーソンを編者として上梓された論文集[Eickelman and Anderson ed.1999]では、出版された当時の研究動向を先取して、メディアと文化の関係を言及した論文がいくつか収められている。また、2001年にハーフェズを編者として上梓された論文集[Hafez ed.2001]でも、研究のトレンドを反映した、「メディア・コントロールと所有」「マス・メディアと発展」「マス・メディアと文化」の3つのテーマが設けられ、メディアと社会・文化をめぐる問題についての考察がおこなわれている。

こうした傾向は、本書にいたってますます顕著になっている。本書では、メディアの「効果」「オーディエンス」「コンテンツ」「倫理」「経済」「法と政策」「文化」の7つのテーマが設けられ、これまで主だったメディアの「効果」が全体の一部として扱われる一方、メディアの内的な側面への着目や、社会的・文化的な側面が強調されている。また、1990年代以降のアラブ・メディア研究では、変化が著しい衛星放送にのみ議論が偏りがちであったが、本書では、地上波放送や映画などの視覚メディア全般、およびプリント・メディアも含めた包括的な議論が展開されている。

*

序章「アラブ・メディア：権力と弱み」カイ・ハーフェズ

●メディアの効果

第1章「政治的機会構造：アラブ・メディアの効果」マーク・リンチ

第2章「影響の欠如？ アラブ世界の公共意見と外交政策決定」ラッセル・E・ルーカス

第3章「エジプトの主要出版へのイスラーム系メディアの影響」カローラ・リヒター

●メディアのオーディエンス

第4章「アラブ・メディアのオーディエンス調査：発展と制約」フセイン・アミーン

第5章「能動性から相互関係性へ：アラブ・オーディエンス」マルワン・K・クライディー

●メディアのコンテンツ

第6章「アラブ世界のメディア・コンテンツ研究：変容する研究アジェンダのメタ分析」ムハンマド・アーイシュ

第7章「視覚的空間への政治的エリートによる支配：レバノンのテレビに関する、質的かつ量的なコンテンツ研究」キャサリーナ・ノッゾルド

●メディアの倫理

第8章「『客観性』への知られざる欲望：アラブ（および西欧）のジャーナリズムにおけるジャーナリズム倫理」カイ・ハーフェズ

第9章「変化のエージェント？ レバノンとヨルダンのジャーナリズム教育におけるジャーナリズム倫理」ジュディス・パイズ

●メディアの経済

第10章「市場のギャップ：アラブ・メディアの経済についての学術的研究からの洞察」ナオミ・サクル

第11章「オリエンタリズムとアラブ報道の経済」トウリヤ・グアイベス

●メディア法と政策

第12章「エジプトとヨルダンにおけるメディア政策と法：連続性と変化」オライブ・アレフ・ナッジャー

●メディアの文化

第13章「アラブ・メディアとカルチュラル・スタディーズ：新たな問いを列挙する」ターリク・サブリー

第14章「裏門を通じて：世俗主義とイスラーム主義の狭間にあるシリアのテレビ番組製作者」クリスタ・サラマンドラ

*

序章では、編者のハーフェズが、現在のアラブ・メディア研究を概観し、各章の要約をおこなっている。ここでは、アラブ・メディア研究がこれまで進展しなかった理由として、マス・コミュニケーション研究者と中東研究者のディシプリンの違い、権威主義政権下にあるアラブ諸国では基礎的なデータの収集自体が困難であること、欧米のマス・コミュニケーション理論がアラブ地域では直接的に当てはまらないことが挙げられている。

第1章では、公共問題や政治的意思決定に対する、アラブ・メディアの影響力の有無が考察される。1990年代に衛星放送があらわれると、その社会的効果を過大評価、あるいは過小評価する2つの意見が生じた。執筆者は、前者を根拠薄弱として退ける一方、後者からも一定の距離をとって

いる。そのうえで、マス・コミュニケーション論における「議題の設定機能」に着目し、「反米感情」や「民主主義」といった問題の意見形成に果たす、メディアの役割に着目する視点が提示されている。

第2章では、ヨルダンを事例に、権威主義政権下にある人々の意見が、政府の重要事項である外交政策に対して影響力を持つかが考察される。執筆者は、国際関係論や民主主義国家における公共意見と外交政策の関係をふまえたのち、ヨルダンにおける両者の関係を考察している。この結果、ヨルダンにおける公共意見は、外交政策に一定の影響を与えるものの、和平条約などの重要事項までは影響が及ばないものと結論された。

第3章では、エジプトにおいて、イスラム系メディアが政府系の主要紙を含めた他のメディアへと与える影響が考察される。具体的には、ムスリム同胞団のウェブサイトと、3つの新聞のコンテンツ分析、およびインタビューにもとづく調査が行われている。執筆者は、現在のメディア技術と政治的機会を効果的に用いることで、周辺的なメディアであっても、主要なメディアへ彼らの関心ごとを伝える可能性が存在すること、また、政治環境の変化につながる新たな公共空間が生じる可能性があることを示唆している。

第4章では、これまでのアラブ・メディア研究におけるオーディエンス研究（視聴者を対象とした研究）が概観され、その問題点が指摘される。1990年代以降のテレビ産業の急速な変容にとともに、アラブの視聴者を対象としたオーディエンス研究は増えている。ただし、権威主義政権のもとでは偏向の少ないデータへのアクセスが困難であることや、訓練をつんだ研究者の不足といったことから、理論的に洗練されていない研究が多い。執筆者は、こうした問題点をふまえつつ、アラブ社会の、文化、経済、政治などの変遷をとりいれた、より科学的視点から研究が進められることを求めている。

第5章では、アラブ・メディア研究における、オーディエンスの「能動性」についての考察がなされる。本論文では初めに、欧米におけるオーディエンス研究の歴史が概観され、アラブ・メディア研究におけるオーディエンス研究との連続性（あるいは断絶）についての考察がなされる。執筆者はアラブの視聴者を対象としたオーディエンス研究が絶対的に不足していることから、いかに人々が情報の「デコーディング（解説）」をおこなっているかが、依然として明らかにされていないと述べ、オーディエンス研究の必要性を力説している。

第6章では、過去40年間になされたアラブ・メディアに関する研究の概観と、先行研究の問題点が指摘されている。1960年代にアラブ諸国が独立を果たすと、近代化とメディアというテーマで多くの研究がなされた。また1980年代以降には、海外からの情報流入が増えるにつれて、文化帝国主義を断じる研究が多くなった。著者はこうしたアラブ・メディアのコンテンツ分析が、理論的ではなく記述的なものであったことを指摘し、今後の研究では、アラブ・メディアをより体系的に捉える理論的枠組みの必要性を説いている。

第7章では、レバノンのテレビ局を事例に、所有者の違い（主に宗派的な背景の違いに基づく）が、実際の放送内容に反映されるかについて検証がなされている。具体的には、地上波を含めた6つの放送局の放送内容が分類され、内容の相互比較がおこなわれる。これにより、各放送局の放送内容には、所有者ごとの利害が強く反映されていること、また、こうした違いは世俗的な放送内容に強く現れ、宗教的な放送内容にはそれほど反映されていないことが浮き彫りにされた。

第8章では、ジャーナリズムの倫理に焦点があてられる。これまで、欧米でなされたアラブ・メディア研究では、「客観的」報道の欧米メディアと、「非客観的」報道のアラブ・メディアという対立的な図式がアプリアリに適應されてきた。執筆者はまず、「客観」の概念について考察をおこな

い、いずれの地域のジャーナリズムにも「客観的報道」を追及する姿勢が存在すると述べる。そして、アラブ、欧米のジャーナリズムは、報道姿勢の差異ではなく、自己のプリズムを通じた報道であるという点に共通性があると結論された。

第9章では、近年のレバノンとヨルダンにおけるジャーナリスト教育の状況が、教育機関関係者へのインタビューなどを通じて明らかにされている。まず、ジャーナリスト教育には、相違する2つの目的がある。それは第1には、倫理教育の装いのもとで自己規制をジャーナリストに内化させる目的であり、第2には、専門家としての訓練をおこなうことで、権力からの圧力に屈しない職業人を養成する目的である。ヨルダンでは、ジャーナリスト教育が前者の観点からとらえられる一方、レバノンでは後者の観点から、こうした教育が社会の変革をもたらす可能性を秘めたものとして理解される傾向があることが明らかにされた。

第10章では、アラブ映画、テレビ放送、出版物などを対象にして、現在のアラブ・メディア産業が直面する問題が、特に経済的側面から考察されている。執筆者は、現在のアラブ・メディアの問題として、市場調査が少ないために番組の製作者がオーディエンスの嗜好をうまくみあげられない状態にあること、また、政府の補助金によって番組作りに影響が出ていること、加えて海賊版が広く流通することなどを挙げている。

第11章では、欧米メディアにみられる、アラブ・メディアへの偏見が指摘され、そうした偏りを少なくするために、統計など実証的データに基づいた研究が必要であることが説かれている。特に欧米のメディアでは、アル＝ジャジーラなどの一部の放送局があたかもアラブ・メディアの典型であるかのような印象や、それらの放送局があたかも戦争報道などに特化しているかのような印象が与えられるという。執筆者は、各報道機関に支払われる広告費の変動などの具体的なデータなどをもとにして、無意識に享受されてきた偏ったアラブ・メディア像の修正を試みている。

第12章では、エジプトとヨルダンにおける、メディア政策と法の関係が考察されている。両国では、これまで国家の安全保障という名目のもとに、ジャーナリストの権限を制限する抑圧的な法が施行されてきた。執筆者は、こうした歴史を概観し、テロ対策を名目とする法が、不都合な事実の隠蔽や、反対勢力を弾圧する口実を与える一方で、発言の自由を求める運動や強い批判をも生む「諸刃の剣」にもなりうることを指摘している。

第13章では、これまでのマス・コミュニケーション研究と、アラブ地域を対象としたカルチュラル・スタディーズのあり方が批判的に検討されている。執筆者は、こうした研究が、主に欧米の人類学者や社会学者によってなされてきたことを指摘する。またアラブ研究者によるカルチュラル・スタディーズでも、欧米の理論を無批判に取り入れる傾向が強く、例えば「宗教——主にイスラーム——が、アラブ文化を概念化する際に……重要な役割を果たしている」(245頁)ことが看過されてきたことが指摘されている。したがって、今後の研究においては、ローカルなコンテキストと欧米の理論をともに汲むことで、より適切な理論の構築が求められことになると結論された。

第14章では、シリアのテレビドラマ制作者に焦点が当てられ、彼らの番組制作をとりまく思想的状況が明らかにされている。シリアは衛星放送の登場により、アラブ地域にテレビドラマ番組の輸出を行う拠点となった。従来、アラブ地域においてテレビドラマは、「世俗的啓蒙」(260頁)の役割を果たしてきたという経緯がある。しかし、テレビドラマが地域的な広がりをもつにつれて、湾岸地域からの消費者から、より「イスラーム的」な番組づくりの圧力が加わることとなった。執筆者は、こうした要請と、職業人としての倫理的責任の間で、テレビドラマの制作者たちが、現在ではなく輝かしいイスラーム帝国を描くことで、現在を美化することのない番組制作をおこなって

いるのだと述べている。

*

アラブ・メディアをめぐる研究は、衛星放送が登場した1990年代以降に急速に進むことになった。それ以前にも、アラブ・メディアに関する研究はおこなわれていたが、そこでは大きく2つの問題が存在した。1つ目は、欧米におけるマス・コミュニケーション研究がアラブ・メディアまでを対象とするものではなかったために、この分野における先行研究が決定的に不足していたこと。2つ目は、アラブ諸国でおこなわれたアラブ・メディアに関する研究の多くが、理論的な枠組みをもたずに、単なる事実の羅列に終始しているものが多かったことである。

しかし、1990年代以降にアラブ・メディア研究の蓄積が急激に増えるにつれて、欧米のマス・コミュニケーション理論と、アラブ・メディアに関する研究の接近が生じた。この理由としては、第1に、欧米の研究者が、1990年代以降に変化が顕著なアラブ・メディアに注目しはじめたこと、第2に、アラブ人の研究者が、欧米のマス・コミュニケーション理論を批判的に摂取し、英語で研究を発表し始めたことの2つが挙げられる。

こうしたスタンスは、本書にも取り入れられている。特にアミン（第4章）、クライディー（第5章）、アーイシュ（第6章）、サブリー（第13章）は、欧米の文献とアラブの文献の双方にまたがる先行研究に言及し、欧米のメディア理論と突き合せながら、広い視野での議論を展開している。彼らに共通するのは、ローカルなコンテクストを実証的に分析するとともに、それをアラブ・メディアに適した理論で捉えなおすことの重要性を説いていることである。

また、リヒター（第3章）やノゾルド（第7章）といった、欧米の若い研究者は、複数のアラブ・メディアの内容の分類・比較をおこない、それらを統計的に示すことで、これまでア prioriに適応されてきた前提を、批判的に捉えなおそうとしている。加えて、ナッジャール（第12章）やルーカス（第2章）は、欧米の議論を踏まえつつ、エジプトとヨルダンの法や政策などを通時的に考察することで、歴史的な視野からアラブ・メディアの考察を試みている。これらに比べ、やや理論的洗練には欠けるものの、パイズ（第9章）やサラマンドラ（第14章）の研究も、フィールドワークに基づく貴重な事例の提供をおこなっているという点で評価できる。

こうした実証的な研究に加えて、新たな視点や視覚をもって、今後のアラブ・メディア研究の争点となる問題を論じた研究もある。メディアの政治的機能を、効果の有無からではなく、「議題の設定機能」に着目して考えることを主張したリンチ（第1章）や、メディアの経済を、海賊版の流通などを含めた広いマーケット・メカニズムで考えることを提唱したサクル（第10章）の試みは、メディアと政治、メディアと経済などのインターディシプリンの試みとして新しい。また、欧米とアラブの間にあるジャーナリズム倫理に関して、差異ではなく類似点に着目したハーフェズ（第8章）や、欧米において根強く残るアラブ・メディアへの偏見に対して、実証的データを提示することで、アラブのメディアが特定の放送局に代表されるものではないことを示したグアイバス（第11章）の試みは、今後の研究に新たな視座をもたらすものとなろう。

以上に本書の貢献をあげたが、問題が全くないわけではない。以下では、問題点を3つにまとめて提示したい。

第1は、放送内容などから統計的に導かれたデータ、およびフィールドワークに基づく対象の観察結果と、そこから導かれた結論の間にときおり飛躍がみられることである。例えば、リヒター（第3章）の研究では、統計的なデータ及び関係者への聞き取り調査から、ムスリム同胞団系の小規模なメディアが政府系新聞のような規模の大きなメディアに対しても影響を及ぼすものと結論されて

いる。しかし、それぞれに重複した報道内容や、新聞社の編集者がムスリム同胞団のメディアを参照している事実から、ただちに相互間の影響があるものと結論づけることはやや強引な印象を与える。相互の影響は複合的なプロセスである以上、ここで取り上げられている4つのメディアがメディア総体のなかでどのような関係性にあるのか、もう少し視野の広い検討が望まれる。また、パイズ(第9章)やサラマンドラ(第14章)の研究も、一部の関係者への聞き取り調査から得られたデータを性急に一般化して提示する傾向が見受けられる。

第2は、アラブ・メディアと宗教をめぐる問題についてである。例えばサブリー(第13章)は、これまでのカルチュラル・スタディーズの理論が宗教の問題を看過してきたと述べている。そして、宗教的な素地を無視した理論でアラブ文化を捉えることに問題があることを指摘している。これは貴重な指摘であるが、宗教がどのように理論的に組み込まれるべきなのかについてはほとんど考察されていない。アラブ・メディアと宗教の関係は重要な問題であり、特にイスラームをどのように位置づけるのかは、今後深化させるべき課題の筆頭にあげられるであろう。

第3は、フセイン(第4章)やアーイシュ(第6章)の論文において、先行研究自体のメタ分析とその問題点の指摘が議論の中心となっているために、たとえばメディアと宗教をめぐる問題など、新しい視点が必要とされる課題に対してさほど積極的な提示がなされていない点に物足りなさが残る。アラブ・メディア研究のいっそうの進展のために、この分野の大御所ともいえる彼らがもう少し野心的に何らかの示唆をおこなっていたらと望むのは、ないものねだりであろうか。

総括的に言えば、こうした若干の問題があるにしても、本書は今後のアラブ・メディア研究を進めていく上での必読の書であろう。本書に収録された論文の多くが現在のアラブ・メディア研究の学問的な水準を明らかにし、また今後の研究課題を浮き彫りにしている。本書で示された問いにいかにか研究者らが答えていくのが、今後のアラブ・メディア研究における焦点となるように思われる。

参考文献

Eickelman, Dale F. and Anderson, Jon W. ed. 2003. *New Media in the Muslim World: The Emerging Public Sphere*. Indiana: Indiana University Press.

Hafez, Kai ed. 2001. *Mass Media, Politics, and Society in the Middle East*. Cresskill, N.J.: Hampton Press.

(千葉 悠史 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Jillian Schwedler. 2006. *Faith in Moderation: Islamist Parties in Jordan and Yemen*. Cambridge, UK and New York: Cambridge University Press. xxi+252 pp.

本書は、ヨルダンのイスラーム行動戦線党(IAF)とイエメンのイエメン改革連合党(イスラハ)という2つのイスラーム主義政党の比較研究である。1967年以来議会が停止していたヨルダンでは、IMF構造調整に国内の反対が高まったのを契機に政治自由化が進行した。1989年に議会が再開され、1992年には政党活動が合法化された。IAFは、92年にムスリム同胞団幹部と、独立系イスラーム主義者によって設立された政党であり、93年から総選挙に参加した。ヨルダン国民の政党に対する不信感は強く、無所属議員が大半を占める中で、IAFは一定数の議員を出し続けて